南日本新聞
2018年(平成30年)8月12日　日曜日　社会　30

東京医大不正入試

「女性差別」に怒り

鹿県内医師　環境整備求める声

医師を目指す女子受験者の得点を一律減点し合格者を抑制していたことが明らかになった、東京医科大学の不正入試問題。"男性優位"と言われる医療現場では、不利な扱いや不用意な言動に傷ついてきた女性医師は少なくない。鹿児島県内の関係者からは「性別による差別はおかしい」「一刻も早い環境整備を」などの声があがる。

患者の検査結果について同僚と検証する樋渡小百合医師＝10日、鹿児島市の鹿児島大学病院

「私立は女性や浪人生は不利」。鹿児島医療センター(鹿児島市)の女性研修医は、浪人時代にうわさを聞いていた。今回の報道を受け「やっと明るみに出たと感じたが、驚きはない」と話す。

研修医は2年の臨床研修後に、どの診療科を専門にするか決める。別の女性研修医は「診療科の選択はみんな悩む。私も結婚、出産、子育てなどの人生設計が選択に全く影響しないとは言い切れない」とこぼす。

県医師会によると、全会員3951人のうち女性は645人。年々増えているが、16・3%にとどまる。現場で働きにくさを感じた経験のある女性医師も少なくない。

「育休明けで当直が免除されたとき、『いつも帰れていいね』と言われた」。2人の子どもを育てる肝属郡医師会立病院(錦江町)の平賀麻衣医師(38)は、男性医師から受けた発言に傷ついた過去を打ち明ける。「子育て中の女性医師はキャリアと両立しようと努力していることを理解してほしい」。ただ「休んだ分の仕事を、男性医師が当たり前に負担する実態は根強い。不満が出ることも理解でき、医師全体の労働環境の見直しが必要」と訴える。

鹿児島大学病院(鹿児島市)産婦人科は個人負担の軽減を図るため、1人の患者を複数で診る「グループ主治医制」を取る。平日しか勤務できない事情がある医師でも、患者をグループの他の医師に任せることができる。ほかに短時間勤務や当直、呼び出しの免除などの支援もある。

6歳と2歳の子どもを育てる樋渡小百合医師(37)は「周囲の理解があって働きやすい。母親として子どもと過ごす時間が確保できる」と感謝する。

県医師会の鹿島直子女性医師支援室長(79)は「働きやすい環境づくりには、リーダーの理解と意識改革が不可欠。経営者や上司が、女性医師を育てる意識を持ってほしい」と訴える。一方で「女性も覚悟が必要。自分のキャリアアップを見据えて努力して」と力を込めた。池田琢哉会長(71)も「地域医療には女性の力が必要。医師会としても環境整備を進めていく」と話した。

(野村真子、中咲貴稔、中村直人)